

## 自己実現への道程

### 序説

#### 動と静

一切のものは動いてとどまらない。

釈尊はそれを「諸行無常」という言葉で表わされた。

天も地も、人も我も、山も川も、月も日も、一切万物、悉くみな変化し、動き流れてやまない。

したがって人としての我も、我の住む社会も動いてやまない。

一切を動かさない、変らないものとして打ち立てた教育や理想、それが変つて、一切が動いているという見解に立つて、生命創造や自由教育の主張が世界を支配している。この動的な教育の主張は当然のことであり、正しいことである。

一切のものゝ半面には、「静」なる半面があると共に、「動」の半面がある。

#### 方向

一切は動く。我も社会も動く。然らばその動く方向が問題になる。

草木の芽が伸びる。それは光に向かつてである。

私も動く。その方向はどちらに向かつてであるか。

向上か、はた墮落か。

光に向つて伸びつゝありや。

暗に向かつて、しばみつゝありや。

「これからだ！ く。」と無限の未来に向かつて躍進を続けている人もある。「私の人生はこれまでです。」と暗い世界に泣いている者もある。

夫が死んだ。長年病気をした。事業に失敗した。思わぬ不幸に引継いで見舞われた。そうした不幸に陥つたまま「私の人生はこれまででした」と泣いている者はいないか。

無自覚な幸福？学校にも行けた。両親もいる。財産もある。何の不幸もない。私はこのままで幸福である。私の向いつつある、歩みつつある方向、そんなものを考える必要がない。果してそうだろうか。

すでに我らの生きる方向がある。

勇往邁進、勝たねばならない。勝たざる者は敗ける。それは動かすことの出来ない法則である。

我らは今、生活戦の唯中に立つた。必勝せねばならない。勝つて勝つて、勝ちつづけてゆく一生でなければならぬ。

自己実現とは、流されたり動かされたり、溺れたり、悲観する生活でなくて、勝ちつづけてゆく生活のことである。

然れば勝つとは一体何か。

形か本質か

もちろん本質のことである。

キリストは十字架にかけられた。ソクラテスは毒杯をのまされた。吉田松蔭は死刑になった。

彼らは皆、形の上は失敗であつた。形が失敗であつたら、皆敗者というのではない。形は失敗でも、本質的に勝つてというのである。キリスト・孔子・釈尊……そんな方々を誰か失敗者だといひ得るだらう。

然り、我々は本質的には必ず勝たねばならない。

怯懦

ことなかれ主義。死の安全。その平和に何の価値があるか、それは卑怯なるがための平和である。一時を妥協し、臭いものに蓋をした姑息な平和。

その平安をひき破れ。我らは極めて勇敢でなくてはならない。我らが我らの真剣な願いのまゝに進む時、世間が笑うかも知れない。失敗するかも知れない。しかしやむを得ない。我らは死の平和よりも、寧ろ戦いを望む。我らは勇敢に、力強く、悪の一切と戦わねばならない。

怯懦なる平和と静けさには、何等の価値もない。自ら信ずる所、堂々と主張したがいい。自ら善と信じたら、一心に実行したがいい。我らは忠実なる自己実現者であらねばならない。我らは自己実現の道程を考えて行く。

自覚

自己

鏡を立てる。自分の顔が映る。どこが好きで、どこが悪い？

内省の鏡の前に立つ。幾多の欠点が見える。

社会の鏡の前に立つ。何が今日までに出来あがつたか。

果して自分が光の中心になり得たか。暗の中心になつてはいないか。

聖賢・偉人の前に立つ。お恥しくて顔さえあげられない。欠陥だらけの自分に愛想がつきる。

おゝ自覚よ。

自己実現の完成は自覚によつて出発する。その自覚は、「汝自身を知る」ことに始まる。

平凡

男か女か、

その問いは極めて平凡である。

しからば、この問いに対して、果して真に答え得たか。

男性だと答えるのか。何という女々しい男性よ。

女性だというのか。何という不純なる毒々しい女性よ。

年は、十九才。仕事は、学生。学資は、親から。親は、百姓。百姓は中農。毎日汗して、二町作って、米五十石。君の学資は月々三十五円、一ケ年四百円から五百円。二十五円の米二十石、一家数人、汗の結晶を三分の一以上君一人が使ってはいいか。そうしてその恩に報ゆる生きた答が、生活を持ってなされてあるか。ことごとく失敗ではないか。まず汝自身を知れ。

反省……「下手な考え休むに似たり」。難解な、哲学だ認識だという前に、

自分と、周囲と、年令と、立場と、それから考えやうではないか。

小便が課長のことを考えなくてもいい。二等卒は、大将の世界はわからない。

欠陥

自分に欠陥が見える。他人を責めていられないほどの醜さが見える。尊い哉、その自覚。

机の引出・押入・台所、……その気で見たら、至る所、醜さだらけ、さながら自分の内部をまる出しにしたような醜さ。眼をおおうて見ないことにするか。すぐ整理に着手するか。

社会に大きな醜さが横たわる。国家の現状に戦慄に価する状態がある。皆知らぬ風、いいえ安価な事なかれ主義、自分さえ損にならなければまあまあ、手を出すな。そういつていられない心が動く。時にはおさえきれぬ公憤さえ感ずる。

青春

老人になるだけ、他人の欠点のみがよく見えて、自分の醜さがわからなくなる。

内に燃え上る生命の火。生々した躍る心の力がなくなって、物の考え方が、功利的になる。

どれだけ儲かるか、他人がほめてくれるか。そうした考えから一步も出られなくなつて来ると、のびのびした人格の創造はなくなつて来る。

人生に大きなものを残した、過去の尊い聖賢偉人や先覚者たちは、決して、この老人魂から出て来なかつた。

「かくすればかくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂」

吉田松蔭先生の童魂である。生命の内よりつき出す、公憤の力、松蔭自身すらこれをどうすることも出来ない。「おい／＼やめておけ、でないとお前の首がとぶぞ」それは事なかれ主義の老人魂である。

私が何をすればいいか。それがわかるのが自覚である。豚のような鈍感からさめて、感激の上に立ち上ったのである。

おゝ目覚めよ！

自覚せよ、童魂にかえれ。

内省せよ、活眼を開け。

光が見える。声が聞える。

汝の新生はこれからである。

## 光明

### 二つの方面

すでに自覚を説いた。その自覚には二つの方面を持つ。

我らの現実には、不足や醜さを感じずるといふことは、その反面に、もつと完全な、理想を描いていることである。

理想と現実、その二つは、自覚の両面である。理想がはつきりしなければ、現実の醜さが、はつきりしない。現実の醜さがはつきりしないから理想が見えない。自覚における理想は決して空想ではない。桃色に心の躍る世界である。我らはこの魂の見つめる前途の希望を光明といつておく。

希望のない者には、生活はない。

### 死活

希望がはつきりつかめた時、我らの心は晴れた曙のように美しく輝く。

前途に光明のない者の生活は死であり、未来に希望の光を常に有する者は生々として輝く。

一切の希望を失った者の重々しい足どりを見よ。希望のない世界には、一切の笑いが封じられる。一切の歓喜が失われる。進歩も向上もなくなつてゆく。

### 美しい魂

我らの眼を自然の上になげる。

床の上に置かれた縞蘭の一鉢

向うのお庭に黄色に熟れた枇杷の美しさ

水辺にかおる花菖浦の美しさ

自然は美そのものではないか。  
人間の上にその目をうつす。  
美しい魂

それは人間の上に咲く花ではないか。

光明に燃え、希望に生き、  
はつきりとした足どりで、

愛と努力の一本道を生きてゆく、

その姿はそのまま美しい花ではないか。

いかなる思想が、この美しい魂を否定するものぞ。

「うつくしい」この一語のなくなった世界は、私にとっては、断じて生きられる世界でない。

光明！

晴れ渡る紫金色の暁を思う！

美の極である。希望に燃ゆるその心を、あの美しい黎明をもつて表象する。いかなる奈落の底に堕ちた者も、この光をにらむことを忘れてはならない。

### 一步

長い長い間たれ込めた黒幕の陰に、いよ／＼開幕の合図の音が聞える。静かなく／＼序曲が荘嚴にそして軽快に響く。胸が高鳴る。かたづをのむ。静かに／＼、黒い幕が開かれる。華やかな舞台に現われる世界は如何に……

私たちは私たちの明日を知らない。劇ならざる、真実の劇が、どう変つてゆくのか、どんなに美しう演ぜられて行くのか、それを知らない。

千両役者、そうだ、皆千両役者だ。

芝居ならば、斬られたはずの男がのこ／＼歩いて帰る。しかし人生で実演される社会劇には、一切のトリックが許されない。斬られた者は永遠に斬られたのだ。

今や、理想の幕は上げられた。

自己実現の完成への一步！

最善の理想を追え。

汝を中心に、大きな社会劇が進展する。

### 感激

ゴム毯が古くなると、たたきつけても躍らなくなる。人間が若さを失うと、感激がなくなる。感激の血の燃ゆるところ、天はそこに人生を左右する不可思議の鍵を渡す。

火の中にでも飛び込む。自刃の下にも立つ。獄門の中をもくぐる。十字架にも上る。

ほめられる。それもよし。くさされる。それもよし。嘲笑するか、それにまかす。迫害するか、それもよし。

一死以つて立つ所、必勝の一本道が現われる。感激のない所にそうした生活はあり得ない。

## 自信

### 現実

眼は天をにらみ得る。しかし手と足は大地につく。感激を持つたまゝで、再び現実に帰れ。その出発点がわかる。他人のしたことなら、何とでも批評が出来る。それならば汝にそれが出来るか。實力以外に、何物も語るに足らない。自信があるか？ 然り！ 然れば直ちに実行に移せ。

### 理想と現実

自分を自分で信じないで、誰が汝を信ずる者ぞ。

### 確信

### 実行

大理想がまず成就される。

久遠に円成されたる大理想と、今の我と、一つにつながる一念の姿を、仏家では「信」とよぶのだ。

大信念があつて実行がある。

信は根本で………実行は枝末である。

真言宗では「従本垂末」………本より末を垂れる………という。

理想は、実行の結果ではない。

久遠の大理想から現実の実行が生れるのである。

真宗ではこれを「信前行後」という。

自信があるとは、大理想がはつきりしたことである。

この大理想が我らの上に、無上絶対の権威ある支配者として君臨するとき、我らの現実は無意味なる存在ではなくて、大理想、直下の現実であり、無限にこの理想を顕現し実現してゆく尊き現実となる。

ああ、来りて大信念を得よ。信は全ての根底である。本成つて末おさまる。無意味にして不統一な実行に、自己実現の生活なし矣。

### 使命

我………この我こそ、神あれば神の、仏あれば仏の全ての栄光を、実現し、顕現したまうべき、神殿であり、仏壇である。

彼は唯、我を通してのみ、一切衆生の上にその慈光を輝かしたもう。

我……………その我こそ、理想という理想を実行し成就すべき存在ではないか。こうした確信は、実に謙虚に、そして忠実に、道を求めた者の当然に到達せる最後の世界であつて、決して高慢なる言葉ではない。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。」月はながむる者の胸に澄み、彼は、我一人のためと信ずる者の上に廻向し顕現する。

大信念は、我らを使命の自覚につれてゆく。

特使の如く立つか、喪家の犬の如く去るか。

敢て問う。汝の使命を発見せりや。

誤解

自信……………

資格がない？ 金力？ 学歴？ 背景……………それ等がないから、自信がないというのか。まぢがいも甚だしい。

そんなものに三文の価値でもあると思うのか。

学士号で国家が救えるものならば、毎年製造される幾千の新学士たちに、七重の膝を八重に折つてでも、世界の現状をその肩書にゆだねる。

肩書で日本がどうにかなるものならば、華族・正何位・勲一等……………とうの昔に日本は救われている。その肩書のまゝで日本を泥まみれにしているじゃないか。

日日深みに落ちてゆく階級闘争が、政治が、外交が、教育が、日本の醜状が、正何位・動何等・何、それで救われると思うのか。休めよ。現代が求めつつある真の声を聞け。家柄を聞くのは結婚の時だけだ。帝大出か、私立出かを聞くのは鼻柱の高い旧式なお嬢さんだけだ。学校名ではない。唯の弁舌ではない。実力を待った、黙つてやれる人格の人だ。

自信を持つとは、水兵に東郷大将の心事を知れというのではない。

確信

立つ。問題に直面する。敢て問う「出来ますか。」然りか、否か。

「出来るだけやります。しかし出来なかつたら知りません。」

そんな曖昧さを許さぬ。弁解を許さぬ。説明も許さぬ。出来るか、出来ないか、然りか否か。

人間に出来ない善は人間の善ではない。

あなたに出来ないことは、あなたの使命ではない。

「これなら出来る！」それだけが、あなたの領域である。

そのあなたに出来る領域を捕らえよというのである。

かく考えた時、あなたの手を待っている事柄があまりに多く、等閑にせられてはいないか。

子供が、危地に溺れる。堂々たる男性すら、出来ないと手を拱いて、あれよくと見のがす。母が身をおどらして、獅子の口より子を救う。出来ないのか、実行しないのか。問題は簡単になる。確信ありや、否やの問題である。

実行

幻か事実か

私はあながち、知行合一論者ではない。しかしながら、どんな高い思想であつても、それが人間の上に何等の關係のない思想であるならば、人生に用事はない。自覚がただの自覚におわり、希望がただの希望におわり、自信がそれだけでおわるならば、ただの空言として、私たちの上から取り除かれる。幻としての自覚、希望、自信、それまでにはいかなる凡人でも至り得る。肝に銘ずるような講演を聞く、発奮する。美しい事実を聞く、深く感激する。読書する、涙が出る程共鳴する。それが、ただの昨夜の夢と消えてゆく。哀れ！十年たつても、元の黙阿弥である。一時の幻か……はたまた、生きた事実にするか……ただそれは実行したか否かによつて決定される。

吉日

無智なる日本人は、昭和の今日でも、日の吉凶をいう。一年三吉六十五日、天は決して吉凶を作らない。今日即ち吉日である。我を真に生かした今日即ち大吉日である。

心がおどる  
理想が見える  
あつてはならぬ現実が見える  
どうすればいいのか  
自分に出来る領域がわかる  
即時に断行する  
自己実現はこゝに完成へと動く。

真の勝利

一切人の皆笑える明るい世界……理想の彼岸、それに照された家庭の現状、呪いといがみあいと皮肉と裁きと……見るのさえ嫌な現実。その闇の中に戦っている二つの中心、嫁と姑、それが家庭の癌腫である。「おいどちらも、強情我慢を棄てて、もう、物を言つちやどうか。」「知りませんよ、お姑さんが言わない限り、私だつて言いませんよ。」



「私だつて言わないよ。三年前だろうが、五年前だろうが、一度こうと思うたら忘れるような甘手とは違いますよ。」

勝つとは何を意味するか。

「知っています。私が先に一口あやまつたら円満になることはわかっていますが、私はまけることが嫌いです。」

然れば勝つとは、相手の腹をえぐるような皮肉を氷のような言葉で言うことか。一つ呪いに二倍の呪いを送ることか。

咄！ 咄！

「知っています。私がまず優しく出さえすれば、相手がまさか鬼でもあるまいし、円満になることは知っています。」

然らば何故実行しないか！ 敗けたがいい、敗けた者こそ真の勝利者だ！

わかっています。しかし、それを実行せねばならぬ位ならば……

お、実行の至難よ。実行の至難にあらず。自覚の貧弱さ。何等の大理想のない死の存在、自己を真に生かそうとする何等の美しい魂を有せぬことに帰着する。

### 小善

何をか大善といい、何をか小善という。

今の世は豊太閤の必要な時代ではない。不戦条約がどうにか調印済みになった今日、ナポレオンは不要である。一切が科学的に、組織的になつて、社会がはつきりした一体となつた今日では、一人の偉大なる指揮者が必要であると共に、万人の忠実な市民を要求する。

人格の実現とは決して大きなことだけを選んで実行することではなくて、小善と雖もこれを見のがさないことである。

形が大きいか小さいかよりも、その一言一行の中に何が動いているかが問題である。

小善を実行しない者は大善をも実行しない。

### 結論

自覚………光明………自信………実行………それは実に我らを大地に実現してゆく道程であつた。

自覚とは、はつきりとした、自分及び理想の認識である。「わかる」ことである。そこに最早よるこびがある。

光明が見える。

自信が生れる。いい知れぬよろこびを感じる。

実行によつて、いよくよろこびは大きくなる。

かくして人生には、決して終極はない。

理想の実現されてゆく無限の未来が開かれる。

白熱の陽の下に輝く青葉のように、理想直下の現実が、現実から未来へと進んでゆく。

限りなき創造の旅、今日も亦生きる。

（梅雨はれて真夏になった日、七月十日）